

舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』に見える

浦島伝説享受の言語遊戯と祝祭性 付、翻刻

畑 恵里子

一 はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』（えほんりゅうぐうあそび）を対象として、浦島伝説という視点を通じて、その享受史における本作品の特徴を簡易に整理したものである。本書の所有者は舞鶴市、データベースは立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ARCと表記する）による。

さて、本書の特徴には次の四点が挙げられる。（１）挿絵と本文とが別々ではなく密接に連動して意味をなしていること、（２）地の文と会話文とのいずれにも、しゃれや滑稽による言語遊戯が多用されていること、（３）浦島伝説の作品展開ではなく、海中を舞台とするという、本伝説の枠組だけが利用されていること、（４）祝祭的要素が全面的に押し出されている作風であること、である。

もっとも、（１）および（２）については、近世の絵本の特徴のひとつであるのだから、その意味においては、ことさらに目新しいものもあるまい。ただし、浦島伝説という視点から見た時、挿絵と言語遊戯とが本伝説の享受史において近世独自の発展のもとに特徴的に配されていることを、本稿で確認しておきたい。

（３）および（４）については、悔恨をにじませる古代の浦島伝説

とは対照的に、そして、鶴と亀との縁起物として末尾を締めくくる中世の浦島伝説享受以上に、作品冒頭から末尾までを通じて、一貫して祝祭的要素を押し出した作品展開となっている点に着目しておきたい。近世以降の明治期の国定教科書などでは、浦島伝説は再び古代の老残などの要素を大きく占めることとなる。よって、祝祭性は、中世・近世の浦島伝説享受の特徴のひとつとなる。

二 書誌情報

作品の内容を確認する前に、舞鶴市糸井文庫について簡易に触れておきたい。本文庫は、一九四九年より舞鶴市指定文化財である。京都府北部を舞台としている大江山・浦島・山椒（山庄）大夫に関する近世（明治期）の資料が、国内でも特に集められているという。それを分類した舞鶴市糸井文庫の目録にあたる『丹後郷土資料目録（改訂版）』では、『絵本龍宮遊』を絵本・豆本の項目に位置づけており、作者未詳、作画未詳、寛政年中板行と整理している（注一）。本目録を作成した糸井仙之助（一八七四～一九四九年）は京都府与謝郡出身、故郷である丹後地域にゆかりの古典籍を蒐集した実業家であり、本文庫をつくりあげた人物である。確認したところ、本目録には修正を要する

箇所は散見されるのだが、コレクターとしての糸井仙之助がこれらの資料をどのように認識していたのかをうかがい知る、ひとつの目安にはなるであろう。

A R Cのデータベースである「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」では、本書を絵本・豆本とする（注二）。豆本とはおおむね五〇mm以下の極めて小型の本である。作者未詳、画は斎藤千山としている。斎藤千山の情報はジャパンナレッジでは不掲載、詳細は不明である（注三）。判型は半紙本、全一卷である。刊行年は未詳、制作は未詳である。本データベースの書誌情報では次のように説明している（注四）。

一丁から八（オ）丁まで残る。『近世子どもの絵本集 上方篇』に収められる『絵本竜門の滝』と本書は同版本。但し、同書に収められるのは明らかな再版本。本書の続編に該当する『絵本竜の都』の初版本の体裁が、表紙が行成表紙、題簽が紅色地紙という本書と全く同様の体裁であることから、本書が初版本と推測される。従って、本書と『絵本竜の都』を一冊にして改題再版したものが『絵本竜門の滝』と考えられる。尚、旧目録では本書の刊年を寛政年中とするが、根拠不明。『近世子どもの絵本集 上方篇』では、『絵本竜の都』が明和末から安永初年の刊と推定されており、ほぼ同時期の刊行かと思われる。

『近世子どもの絵本集』には「上方篇」と「江戸篇」とがあり（注五）、浦島伝説を長期にわたり精力的に研究してきた林晃平は、『絵本龍宮遊』について「安永八年、79以前？ 絵本、改題本『龍門の瀧』（注六）と分析しており、右のA R Cデータベースの書誌情報と重なる指摘をしている。国文学研究資料館の調査（昭和五二（一九七七）

年九月）では「欧州所在日本古書総合目録にもデータあり」（注七）としている。

三 『絵本龍宮遊』における挿絵と言語遊戯

さて、上代に発生した浦島伝説は、言葉の叙述を軸に老残や死をにじませる中古の作品群、挿絵を押し出して縁起物としての色彩を明確に帯びるようになる中世の作品群、そして、挿絵と共に多彩なバリエーションを有する近世の作品群へと至る。そのような中、本書は、挿絵と本文とがことに連動している傾向にあり、挿絵を見なければ文意を把握しにくい箇所が散見する。換言すれば、挿絵が時に本文以上の効果を有している点が特徴の筆頭に挙げられよう。

現存最古の浦島伝説の記録は古代に遡る。比較的簡略な『日本書紀』雄略天皇三二年七月条、詳細な『丹後国風土記逸文』、長歌反歌一首からなる高橋連虫麻呂の「詠水江浦嶋子一首并短歌」（『万葉集』巻第九・一七四〇番歌、一七四一番歌）、『浦島子伝』、『続浦島子伝記』がある。『源氏物語』では、求婚者の夕霧によって都へ連れられる落葉の宮が「恋しさの慰めがたき形見にて涙にくもる玉の箱かな」と独詠、亡母の「かの手馴らしたまへりし螺鈿の箱」を「形見」に見立てて携えてゆく姿を評して、語り手が「浦島の子が心地なん」と述べていることから（新編日本古典文学全集、「夕霧」四卷四六四～四六五頁）、中古では、浦島伝説がある程度浸透していた様子がうかがえる。これらは言葉によって表現され、叙述され、紡がれた作品展開である。とはいえ、中古でも絵巻の類は親しまれていた。たとえば、『源氏

物語』の「絵合」巻は、絵巻の批評そのものに言及している。藤壺の宮の御前で物語絵の優劣を競う場面では、「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭」（新編日本古典文学全集、「絵合」二巻三八〇頁）や「伊勢物語に正三位」（新編日本古典文学全集、「絵合」二巻三八一頁）、すなわち、『竹取物語』『うつほ物語』『伊勢物語』そして現在は散逸している『正三位』という物語が選び取られていて、絵と共に批評されている。その他、「長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、事の忌あるはこたみは奉らじと選りとどめたまふ」（新編日本古典文学全集、「絵合」二巻三七七頁）などもあり、玄宗皇帝と楊貴妃との悲恋を描いた『長恨歌』や元帝と宮女・王昭君との悲しい離別を描いた『王昭君』などは控えたところ。ここには浦島伝説は取り上げられていない。無論、言及されていないからといって、物語絵として享受されていなかったことにはならないのだが、浦島伝説はどちらかといえば言葉の享受によって受け継がれてきた印象が残されている。

もっとも中世以降は、渋皮版の御伽文庫など、言葉に加えて挿絵でも作品世界が引き継がれ、表現されてゆく。室町物語の『浦島太郎』は、絵巻や奈良絵本などの表現をとる。興味深いのは、京都府与謝郡伊根町に位置する浦嶋（宇良）神社が保有している『浦島明神縁起絵巻』（卷子本および掛幅形式）であり、比較的古い浦島伝説の伝本であるのだが、言葉をまったく使用していないという特徴を備えており、絵の持つ圧倒的な存在感がきわだつこととなる。

そのような中、舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』では、言葉と挿絵とが効果的に活用されている。たとえば、「あまだい、御とも。」（六

丁裏）という叙述がある。その文言から、甘鯛を模した人物が乙姫の供人として説明されているかと想定されるのだが、併せて挿絵を確認すると、一人の尼が描かれていることがわかる（図版1）。つまり、単に侍女が甘鯛であることを指している文言ではなく、供人が尼姿だからこそ、甘鯛が魚介類の中から選ばれ、擬人化され、叙述と挿絵とが連動して、初めて意味を持ちえていることがうかがえる。この情報は、本文ではなく、挿絵からのみ、受け取ることが可能である。換言すれば、本文のみでは、尼姿の「あまだい」を読み取ることはできない。

そして、この甘鯛の先には、乙姫が「こいぞつもりてふちとなる。」じゃの。」（七丁表）という台詞と共に描かれている。近世期には庶民層へも浸透していた『小倉山荘色紙和歌（小倉百人一首）』、その一三番歌、陽成院の「つくばねの峰より落つるみな川恋ぞつもりて淵となりける」を踏まえた会話文が記されている（注八）。乙姫の背景には、巨大な瀧の淵が描かれていることが、挿絵からわかる。これも挿絵ならではの効果であろうし、著名な古典作品の二次創作でもある。

二次創作という側面から見た時に興味深いのは、本書では、擬人化された魚介類のみならず蒲鉾姿の男性も登場していることである（図版2）。魚介類そのものに比して、魚のすり身を成型して焼き上げられた加工品である蒲鉾は、いわば二次的な存在といえよう。「かまぼこ。まるやけにあいし、とどけに出る。」（八丁表）と地の文があり、挿絵を確認すると、頭頂に蒲鉾が描かれている一人の男性の姿が見つかる。実は、蒲鉾は、舞鶴市糸井文庫蔵『新版龍宮洗濯噺―芋蛸の由来―』など、他の浦島伝説をひいた作品でも取り上げられている素材

であり（注九）、近世の浦島伝説では浦鉾はしばしばつきものであるようだ。これらからは、近世の浦島伝説享受における二次創作の類似性を見て取ることも可能であろう。

さて、本書の二つ目の特徴は、擬人化された魚介類たちの台詞が地の文に比して圧倒的に多く、大半が会話仕立てになっていて、地の文と会話文とのいずれにもしゃれや滑稽による言語遊戯が多用されている点である。

たとえば、本書の冒頭では、「貝」という言葉が繰り返されている。「乙姫を貝（かい）まみてより」（二丁裏）には、日本古典文学では恋にまつわる常套表現である「垣間見」と、魚介類を踏まえた「貝まみ」とが、それとわかりやすくかけられている。垣間見は、男性が女性を物陰からひそかに見初めて、その結果、恋が始発するというのが典型的な形式であり、古代より定石であった。乙姫への「貝まみて」の後には、「きづ貝（かい）あるな」（二丁表）、「手む貝（かい）いたさぬ」（二丁裏）、「たのむ貝（かい）なきやつばらめ」（三丁表）などと、たみかけるように、効果的に「貝」が重ねて配置されている。いわば言葉の上での「貝」遊びである。

その他、「ごてんやくのいかたち」（四丁裏）という叙述の周辺にも、類似した特徴が指摘できる。烏賊たちが医師として城内に詰めているのだが、烏賊たちの隣には「いかにも、いかにも。」（四丁裏）という台詞が配置されていて、肯定表現である「如何にも」と魚介類の「烏賊」とがかけられている。なお、本書とは別の作品であるが、同じく浦島伝説を享受する舞鶴市糸井文庫蔵『新版龍宮洗濯噺―芋蛸の由来―』などでも、烏賊は医師の役割を担う魚介類として叙述されている。

る。おもしろいことに、蛸はそこではいわゆる悪代官の位置づけであり、龍王にかわって龍宮を乗っ取り支配しようとするものの、最後には成敗されるという役回りとなっていて、勧善懲悪の筋立てである。とはいえ、浦島伝説とは関連性の稀薄な、単純な言葉遊びも多い。たとえば、「姫殿の魚意（ぎょい）にいり、ありが鯛（たい）こと、おはだはむっちりと、さしみでござるし。」（五丁表）という台詞も単純な言語遊戯であり、「御意」は「魚意」と表記されていて、音を仮借してかけられている。「お鯖（さば）き、御もつとも。」（七丁裏）にも、白州での代官の「お裁き」と「お鯖（さば）き」とがかけられている。これらは龍宮の魚介類に基づく言語遊戯である。

このように、本書の挿絵も言語遊戯も、古代の浦島伝説をそのまま踏襲しているのではなく、近世の古典作品の享受の特徴を備えた、こなれた様相を呈している。無論、これらは近世の絵本や草双紙の一般的な特徴にすぎないともいえるのだが、浦島伝説の享受史の視点から見ると、上代・中古の古代の悲劇的な喪失感を伴う言葉の享受とは明らかに異質であり、挿絵と言語遊戯とで形成されている視覚と笑いとを伴う作品であることを、ひとまず確認しておきたい。

四 『絵本龍宮遊』における浦島伝説の枠組と祝祭性

本書の三つ目の特徴は、古代から伝わる海中の異界訪問譚という浦島伝説の展開はさほど引き継がれておらず、海中を舞台とするという、いわば枠組のみに焦点が向けられ、利用されている点である。

浦島伝説につきものの亀も龍王も、玉手箱も、姿を見せない。浦島

はその名が記されている程度である。主体は乙姫であり、婚礼が舞台となっている。さらに言えば、主眼は乙姫というよりも、多彩な魚介類たちの動静だ。「鮑」「鯛」「蛸」「(一丁表)」「しゃちほこ」「海鰻」「貝」「(一丁裏・二丁表)」「はまぐり」「いしもち」「(二丁裏・三丁表)」「鱸」「古野城」「鯆」「鰈」「(三丁裏・四丁表)」「いか」「蛙」「ゑい」「鰯」「さごし」「(四丁裏・五丁表)」「鮓」「(五丁裏)」「あまだい」「さより」「いとより」「鮎」「(六丁裏・七丁表)」「しんじゅ」「福だめ」「昆布」「ごまめ」「こち」「ほうぼう」「鮠」「鯖」「うなぎ」「くじ」「鯉」「ぶり」「(七丁裏・八丁表)」などが、所狭しと活躍している。特定の季節の魚介類が描かれているというよりも、網羅的に描かれているようである。

他の浦島伝説享受の作品である舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版竜宮曾我物語』でも、数多くの魚介類が登場していて、浦島の夢の中で狂言歌舞伎の曾我物語を上演している。曾我兄弟の兄に桜鯛が、弟に伊勢海老が扮していて、当て込みの手法によって配役が選り取られていることがうかがえるのだが、曾我物語歌舞伎の登場人物に準じて配役が決められているため、本書ほど多様な魚介類は登場していない。しかも、海藻類の「昆布」を男性に擬人化して描いている点は、他の浦島伝説享受ではあまりなく、目を引く。

このように、浦島伝説は作品展開ではなくその枠組が援用されており、言語遊戯に基づく魚介類や海藻類へのまなざしこそ、多彩に叙述されている。それは、浦島伝説が民衆にも十分に浸透していて、その上で二次創作がなされていたことを意味していよう。

本書の四つ目の特徴は、作品冒頭から全体を通じて、ハレの祝祭的

な雰囲気押し出されている点である。

強いられた再婚に煩悶する『源氏物語』の落葉の宮が思わずつぶやいていたように、浦島伝説は、「形見」や「涙」などの言葉を誘引する作品として、中古では享受されていた。懐かしいはずの故郷はすでに見知らぬ土地となっており、いわゆる玉手箱を開封した結果、思いもよらぬ老死を迎えるという上代の伝説の結末を受けたものである。中世の御伽草子の『浦嶋太郎』以降も、「あけてくやしき」などのネガティブな言葉が常套的に結びついてくることとなる。

しかし、そのかたわら、浦島の老齢や龍宮という神仙思想に基づく異界訪問から、浦島伝説は次第に長寿や仙人などの枠組に入れられて祝祭の要素を併せ持つようにもなっていく。ことに本書では、作品の冒頭より、祝祭性は色濃く表現されている。たとえば、乙姫は「婚礼」「(一丁表)」「嫁入」「(一丁裏)」を控えており、「はつもふで」「(五丁裏)」、つまり初詣に向かっている。さらに、五丁裏・六丁表にわたる挿絵には、乙姫の乗っている船の名が「龍門丸」と大きく掲げて描かれており、あたかも門出を祝う龍宮一門といった風情を、挿絵によって演出している様子がうかがえる。結婚、正月、船出。縁起物にまつわるこれらの言葉と挿絵とを複合的に連動させて表現することによって、浦島伝説が老死ばかりではなく、長寿や寿ぎの作品としても広く受け取られてきたことが、一読してただちに看取できる内容構成となっているのである。このような特徴は、浦島伝説享受においては、近世に至るまで見当たらない。中世でも、末尾になってようやく鶴と亀との縁起として結末を迎えているのであり、ここまで寿ぎの要素を前面に押し出すことはしていない。他の作品でも、近世の浦島伝説では、老残

や死去による従来のネガティブなメッセージではなく、祝祭的な色づけが明確になされた享受が数多く派生してゆくのだが、本書は絵本であるだけに、それが視覚的效果のもと、読後ただちに読者へと伝わってゆく。こうした特徴は、新春の縁起物である曾我物歌舞伎を踏まえた舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版竜宮曾我物語』などとも通底している（注一〇）。そこには、近世の大衆文化における、ある種の成熟の指標としての、そして、寿ぎの文学としての浦島伝説の近世享受の一端がうかがえる。

五 おわりに

舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』に見いだせる特徴を、浦島伝説享受の視点から四点挙げてみた。古代や中世における享受と比較すると、（一）挿絵と本文とが密接に連動していること、（二）地の文と会話文とのいずれにも、しゃれや滑稽による言語遊戯が多用されていること、（三）浦島伝説の作品展開ではなく、海中を舞台とするという枠組だけが利用されていること、（四）祝祭的要素が押し出されている作風であること、この四点が指摘できる。

これらは、近世の浦島伝説の享受ではしばしば指摘しうる事柄であるのだが、ことに本書は、浦島関連の作品の中でもその要素が強い。（三）の海中という枠組の援用についても、他作品では魚介類が主であるのだが、本書では海藻類に加えて魚介類の二次創作的存在である蒲鉾も擬人化して登場しており、魚介類の範囲は一層多岐にわたっている。

そして（四）の祝祭的要素では、結婚、正月、船出などの祝賀の行事などから明確にハレにあることを強調した構成となっており、古代浦島伝説や明治期の国定教科書に見られるような、老死や悔恨をにじませる旧来の展開とは一線を画している。この桁外れの祝祭感は、近世の浦島享受ならではの特徴である。そこには古代のような作品展開は稀薄であり、冒頭から末尾まで、祝祭性のもとに、龍宮の世界で彩られた海中の言語遊戯が浦島伝説を再生産している。

浦島伝説そのものが近世では庶民にも親しまれ、人口に膾炙しているからこそ、このような言語遊戯や派生が面白がられているのであり、絵本や豆本という比較的簡便な形態を通じて浸透していると考えられる。それは、古代に成立した文学作品が成熟して、再生産され、庶民にも享受されてきたという近世文化の持つ特徴の一端でもある。

（注一）糸井仙之助編『丹後郷土資料目録（改訂版）』（舞鶴市教育委員会、一九五七年）。

（注二）立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」 <https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>（閲覧日二〇二一年一〇月一六日）。

（注三）「ジャパンナレッジ」 <https://japanknowledge.com/>（閲覧日二〇二一年一〇月一六日）。

（注四）立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」、（注二）前掲DB。

（注五）中野三敏、肥田皓三、鈴木重三、木村八重子『近世子どもの絵本集』（岩波書店、一九八五年）。

(注六) 林晃平「龍宮的イメージの形成―近世の浦島伝説とその周辺をめぐる―」(『苦小牧駒澤大学紀要』、二〇〇二年)。集成に林晃平『浦島伝説の展開』(おうふう、二〇一八年)、林晃平『浦島伝説の研究』(おうふう、二〇〇一年)がある。

(注七) 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/> (閲覧日二〇二一年一〇月一六日)。

(注八) 百人一首関連は吉海直人が詳しい。吉海直人『百人一首への招待』(ちくま新書、一九九八年)など。

(注九) 畑恵里子、原豊二、西野由紀、園山千里、荒川吉孝「舞鶴市糸井文庫蔵『新版龍宮洗濯噺―芋蛸の由来―』翻刻・語釈・抄訳および英訳」(『静岡英和学院大学・静岡英和学院短期大学部紀要』、二〇二〇年三月)。

(注一〇) 畑恵里子「舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版竜宮曾我物語』から見える寿ぎの文学としての浦島伝説」(『日本文藝』、二〇二〇年三月)。

付、翻刻

凡例

一、舞鶴市糸井文庫に所収されているものを底本として翻字する。立命館大学アート・リサーチセンター「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データを基本的に使用する。必要に応じて、舞鶴市糸井文庫本を直接確認する。

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>

一、「国立国会図書館蔵デジタルコレクション」を参照する。使用した場合は適宜明記する。

<https://dl.ndl.go.jp/>

一、かな遣いは底本に拠る。濁点、句読点、半濁音、「」(会話文)、改行を適宜施す。

一、繰り返しを示す踊り字(く、ゝなど)は、それぞれ、もとの字に置き換える。

一、底本に促音や拗音がある場合、小さく記す。

一、漢字の字体や送りがなは、こんにちの一般的な用法に近づける。

一、底本にふりがながある場合、() 内に原則記す。

一、文字の判読が不可能な箇所は□で示す。

翻刻

(二丁表)

序

爰（ここ）に風流（ふうりう）を画（ゑかい）て、童子（わらんべ）は機（き）げんとりとなせるを見れば、波海底（なみかいてい）の事乎（ことか）。乙姫（おとひめ）の婚禮（こんれい）、龍門（りうもん）の道（みち）すがら、鮑（あわび）のらうぜきは片（かた）おもひの邪（よこしま）。目出鯛（めでたい）政道（せいどう）に和（やわら）ぐうまさは、蛸（たこ）の仲人（なかだち）、あつめざかなのしなじなは、お氣（き）にいらば、やつとこせい献（こん）、やつとこせい献（こん）。

（一丁裏・二丁表）

「おいわいがたとある。」

「鯛（たい）せつなおともじゃ。」

魚官（ぎよくわん）たち、御供（とも）。

「ぎうぎう。」

龍宮（りうぐう）、乙姫（おとひめ）、龍門（りうもん）の御車入（こくるまいり）行列（ぎやうれつ）。

しゃちほこ、かなぼう、ひきさきはらふ。

海松（うみまつ）のしげみ。

鮑（あわび）、岩（いわ）にとりつき、くふうする。さしゑとさいをいいきかす。

「たいらげ、たいらげ。」

「おれがいしもつ、かたももつぞ。」

海蛸（ばい）。

「まがったしりは、おれがもつぞ。乙姫を貝（かい）まみてより、た

よれども、かたおもひとて返（へん）じもせず。このたび、龍門ゑ嫁入（よめい）とや。ここえうばいとりしわんじゃ。」

「おやさへにらみしわれら、いはふていしをうちかけ、うばいとり、いしがれの名をあげん。きづ貝（かい）あるな。」

（二丁裏・三丁表）

「かかる目出鯛（めでたい）折（か）から、御車（みくるま）のさきのらうぜき、いそうつなみのまくりうちにてくりゃう。」

しゃちほこ、はまぐりをつぶてにうつ。

「ゆるしたまへ。これでは、ぐりはまになります。」

「波波（なみなみ）でおこうか。」

「いしもちとはりよぐめい。手波（てなみ）をみおろ。」

いしもち、にげる。

「そりゃ、しゃちばりかへるは、それでたたいてよいものか、貝（かい）はれます。」

「さし出るきはない。手む貝（かい）いたさぬ、御めん、御めん。」

「ひどいめにあわびとちやにぎよよを。」

「たのむ貝（かい）なきやつばらめ。ゑゑ、むねん。」

たたかれて、にげちる。

「このはがれとや、うき名たつらん。」

「こりゃ、かいづくしの、にごとぬのじゃ。」

（三丁裏・四丁表）

「こいがたき、のぼりやなゑゑ。」

鱸兵庫（すずきひやうご）。

「ごもんをめざしてまいらふ。」

「おびたたいおにもつじゃ。」

古野城（このしろ）兵衛。

「御門（ごもん）がみへます。」

「したした。」

「もつ殿のお荷物（にもつ）より、おもひ。」

「ゑらいしごとじゃ。」

早瀬鱗平（はやせりんへい）。

鯨川鯨渡（あぢかはいと）。

「あたまなうをで、かさがきられぬ。」

「りうもん殿のうちは、おにぎやかにあるなあ。」

「おつとせい。」

「かたかゑるぞ。」

川太郎。

「まうせとなあ。」

（四丁裏・五丁表）

龍門御殿（りうもんこてん）。

ごてんやくのいかたち、つめる。

「いかに、いかに。」

鮭（さけ）にゑい。

「ごとう流（りう）では、いかのこうをとるときは、官（くわん）にするめま上げる。」

「鰯（たら）ふくたべように、これも、おめれ鯛（たい）じゃ。」

ふと、おなかだち申、「御龍体（りうたい）、ますます魚（ぎょ）きげんよく、こん日、魚入車恐悦恐悦（ぎょにうしゃきよゑつきよゑつ）、しびなり申てむまさはせっしゃせっしゃ。」

「姫殿の魚意（ぎょい）にいり、ありが鯛（たい）こと、おはだはむっちりと、さしみでござるし。」

御ほねかしら、さごし。

「うづだかいひれのあるむこ殿で、そこもと殿のいかいおはたらき、このちは、あしをおだしなされても、みないただかにやらぬ。」

（五丁裏・六丁表）

乙姫、りうもんゑ、はつもふで。

龍門丸。

鮒、ころをおす。

「ちと、よこになる。」

「おれはふなもり（舟守）じゃ。」

「おもしろや、ときしも、いまわ貝（かい）な。」

「さんも、よいにはじゃ。ようづがふかいでよいぞ。」

「りうもんのたきが、みへます。」

（六丁裏・七丁表）

あまだい、御とも。

「さよりどの、みさんせ。めつらしい所こらうん。」

「このたきをのぼり遊ばしたかいの。」

「乙姫殿、ごらん遊ばせ。むこ殿の御しゅっせの龍(りう) もんでござります。」

「こいぞつもりてふちとなる。」じゃの。」

「お手をひきましよう。」

「手より足(あし) がひいてほしゅござる。まだたっしやで、木(き) 糸ものぼりますぞや。」

「いとより、あぶないぞ。」

「あい、あい。」

鮎。

「わしゃ、よこにならとびましょ。」

「つばにこりたもの。」

「あの瀧(たき) つば、みさんせ。とびこんでみしょかへ。」

(七丁裏・八丁表)

御鯛官所(おんたいくわんしょ)。

めて度時(じ) せつ、しんじゅ、福(ふく) だめをさしあげしより、
鮑(あわび) のらうぜき、御赦(ごしゃ) めん下さる。昆布(こぶ) がねがいにより、すがたをやつし、のしとなりては、祝儀(しうぎ) のばへ、かつてに出(いづ) べきむね、仰付(おおせつけ) らる。あ
ぢかきあげをよみ、鮑と鯛(たい) けつの所。
しんじゅ。

ふくだめ。

「かれめ、にくいやつなり。ごめさへ、とくにまじわる魚のふんと
して貝にくみせしだんぢうざいなり。曲事(きよくじ) にむしあげよ。」

といふ。

昆布(こんぶ)、あわびのわびを申。のしこんぶと、どうかくに仰
(おおせ) をこうむる。

いしもち、かれとくみし、おひはられ、うわのなかにても、これよ
り石の下にかくるる。

かれとがおりく、むしあげらる。

こち。

「いながねがいの鮎(すじ)、お聞(きき) とどけくださる。蓼蓼
(たでたで)。」

あわび、ふびんとおぼしめし、御めんをねがい奉る。

ほうぼう。

鮎書(くちがき)。

「お鯖(さば) き、御もつとも。」

「めぐるかす市やつめ。」

うなぎとくじをしかけ、ねがいにいづる。

いせ鯉龍門(ごいりうもん) 糸のさしかまいあるにより、名(な) を
あらため、いごは、名よしと仰付(おおせつけ) らるだん、かしこま
りたてまつる。

ぶり。

舍利堂(しゃりどう)、しゅふくのねがい。

かまぼこ。

まるやけにあいし、とどけに出る。

いなねがいの鮎(すじ) 立(たち)、よろこぶ。うながし□なは□。



図版2 舞鶴市糸井文庫蔵
『絵本龍宮遊』八丁表



図版1 舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』 六丁裏・七丁表

謝辞

舞鶴市、小山元孝氏、狭間敏行氏へ謝意をあらわす。本研究はJSPS科研費 JP21K00294（日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「海洋文化圏から見る浦島伝説の宗教観」研究代表者 畑恵里子）、および、立命館大学アート・リサーチセンター文部科学省国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」国際共同研究課題（研究設備・資源活用型）採択課題（研究代表者 畑恵里子）の成果の一部である。

要 旨

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『絵本龍宮遊』を翻刻して、簡易な解題を付したものである。本書の特徴に、(1) 挿絵と本文とが密接に連動していること、(2) 地の文と会話文とのいずれにも、しゃれや滑稽による言語遊戯が多用されていること、(3) 浦島伝説の作品展開ではなく、海中を舞台とするという枠組だけが利用されていること、(4) 祝祭的要素が押し出されている作風であること、これら4点を指摘した。

abstract

This paper is a reprint of “Ehon Ryūgū Asobi” (Picture Book on Fun Time in the Ryūgū Castle), owned by Itoi Bunko in Maizuru City, in the northern area of Kyoto Prefecture, with a simple explanation. As for the book, four specific features are noted: 1. the close linkage between the illustrations and the text, 2. the abundant wordplays with pranks and humorous moods in both depictive and conversational sentences, 3. the limited commonality with the widely known legend associated with Urashima, sharing only the scenes of the stories unfolded in the sea, quite different from each other's content, 4. the characteristic style in festive atmosphere.